SCENE 3

時代とともに変わるキッチン

ライフスタイルの変化に伴って住宅の中で大きく変化しているのがキッチン。昔、住宅の片隅に追いやられていた台所が、ライフスタイルの変化とともに、DK（ダイニングキッチン）となり、生活の中心、家族のコミュニティーの中心になった。

Part 1

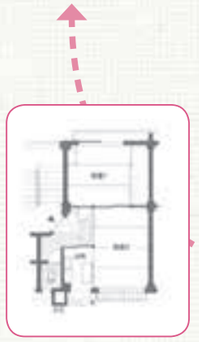
DKの誕生
日本住宅公団が先導した食卓革命

食卓を通じて家族のつながりを生み出してきたDK。DKという表現は日本独自の呼び方で、UR都市機構の前身である日本住宅公団が考案したものだ。公団が先導し、その後全国に広まった〝昭和の食卓革命〟から55年。DKの誕生を、当時の姿をしのばせる写真や間取りで振り返る。

DKは憧れの新しいライフスタイル

DKの中心は特製のテーブル

台所と食堂を合わせることによって、スペース効率と合理性・快適性のアップを両立した住まいが生まれた



多くの家庭がちゃぶ台を囲んで食事をした

間取りの呼び方でいまやすっかりおなじみのDK（ダイニングキッチン）。英語のようだが海外では通じない。食事室を意味する「ダイニングルーム」と、台所を意味する「キッチン」という2つの英語を組み合わせた和製英語だ。

生まれは1957年（昭和32年）。「もはや戦後ではない」と経済白書が新しい時代の幕開けを宣言した、わずか1年後のこと。設立間もない日本住宅公団（現UR都市機構）は、従来の公営住宅の標準的な間取りよりおよそ1坪（約3・3㎡）広い13坪での間取りのレイアウトに知恵を絞っていた。

解決すべき課題の一つが食事と就寝の場を分ける「食寝分離」。当時、食事には〝ちゃぶ台〟という座卓を用いるのが一般的だった。食事の時はちゃぶ台を使い、床に就く際は畳んで布団を敷いた。テーブルで食事をするという新たなライフスタイルを提案することで生活の質を向上したい――公団の設計担当者はこう考えたのである。

当時の主流だった人研ぎの流し台

量産に成功したステンレス流し台

流し台が人研ぎからステンレスに変わって、大きく変化したキッチンは、その後も換気扇を付け加えるなど様々な進化を続け、使い勝手を向上させていった

最新の電化製品に囲まれた昭和の食卓

ピカピカの流し台のある明るい台所

台所の側にも課題があった。家事は家庭の中で下働きとして扱われ、台所は北側の隅っこに追いやられていたのである。設計担当者は、台所を南側の開かれた場所に移すことによって、家事を生活の表舞台に出し、モダンな生活の実現、女性の地位の向上に寄与したいと考えた。

限られたスペースの中で、食寝分離と台所の快適性のアップを両立するために公団が出した答えがDKだった。そして、DKの利用法を定着させるため、公団オリジナルのテーブルを置いた。狙いは当たり、DKでテーブルを囲む食事が、憧れのライフスタイルとなり、全国に普及していった。

ステンレスの流し台を量産

当時、流し台には主に「人研ぎ」と呼ばれた人造大理石の研ぎ出し仕上げのものが用いられていた。ただ、変色やひび割れの問題を抱え、見栄えはあまり良くない。家族団らんの場となったDKの流し台としてマッチしているわけではなかった。

この問題に対する公団の答えがステンレス製の流し台の導入だった。変色やひび割れの問題もなく、ピカピカで台所が明るいイメージになる。

ただ、当時、流し台を作るにはステンレス板を溶接で継ぎ合わせる必要があった。これでは人手がかかって量産できず、コストが高くつく。

プレス機でシンクを成型すれば、コストは引き下げられるのだが、工場で試すと力の加わる端の部分で、どうしても割れてしまう――。

昼夜を問わず試行錯誤を重ねるうちに、ステンレス板の表面に微細な凹凸があると、プレス加工の時に割れてしまうことが判明した。そこで表面を丹念に研磨してプレスすると、見事に1枚のステンレス板がシンクの形に成型できた。

ピカピカの流し台の導入で、DKのイメージはさらに上昇した。そして高度成長時代を迎え、DKには電気冷蔵庫、電気炊飯器、トースター、ミキサーなど次々と、新しい家電製品が並んだ。自慢の家電製品がそろった明るいDKに家族が集い、ダイニングテーブルを囲んで食事をとる〝昭和の食卓〟がこうして誕生した。

SCENE 3

多様化する キッチンスタイル

NEW

アイランドキッチン

キッチンをリビングダイニング（LD）の中に島のように配置している

クローズドキッチン

ダイニング（D）とキッチン（K）が分かれている

バックカウンターキッチン

オープンキッチンにバックカウンターが付いている

対面式キッチン

カウンターが付いた対面式キッチン。写真のような、脇の壁のないタイプが人気を集めている

Part 2 進化するDK ライフスタイルに合わせて多様化

DKが家族の団らんの舞台になって50年以上。その間、日本人のライフスタイルや住環境は大きく変わり、多様化した。それに伴って、DKにも様々なスタイルが生まれた。

1970年代なかば、人々のライフスタイルが大きく変わり多様化するのに伴い、DKも大きく進化を遂げることとなった。

その代表的なものが対面式キッチン。キッチンで調理中、顔を上げればダイニングの様子が分かるレイアウトだ。「キッチンの様子は見られたくない」「でも家族とのコミュニケーションは大切にしたい」という2つの要望を満たしたこの対面式キッチンは、現在提供される多くの新築住宅で取り入れられている。

一方、クローズドキッチンも人気がある。そこには「キッチンの様子を見られたくない」というユーザーの思いがうかがえる。台所を常に整理整頓してきれいに保っておくことは、主婦にとってかなりの負担なのかもしれない。

バックカウンターキッチンはオープンキッチンの後ろにカウンターを付けたレイアウトだ。ダイニングとの一体感を残しつつキッチンの様子をある程度隠すことができる。また広い作業スペースが確保されるので、夫婦や親子で一緒に料理をするには好都合だ。

最新タイプではアイランドキッチンがある。大胆にキッチンセットを部屋の真ん中へ配置したレイアウトだ。家族がキッチンを囲んで料理を楽しんだり、ホームパーティーの舞台にもなったりするので、食を通じた団らんを重視する家庭にはぴったりと言えるだろう。

※Beforeの写真・レイアウトは、改装前の一例です

BEFORE

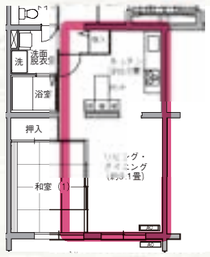
オープンキッチン

リビングからもキッチンの様子が見えてしまう

AFTER 4

バックカウンターキッチン

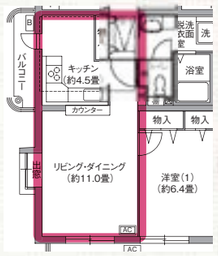
バックカウンターを設けることで、子どもと一緒に料理したりすることもできる



AFTER 3

対面 ＋ L字型キッチン

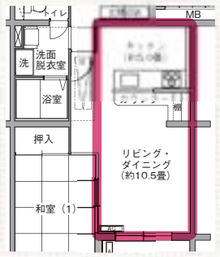
L字型のキッチン。流し台の前にカウンターを設けている



AFTER 2

対面+ローカウンターキッチン

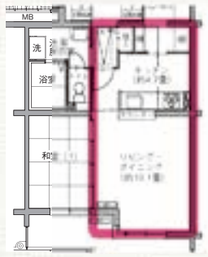
子供に合わせて、カウンターの高さを低くしている



AFTER 1

対面 +I字型キッチン

カウンターを設けたI字型のキッチン



Part 3 URのリニューアル 画一的なDKを様々なタイプに

従来、団地の間取りといえば、画一的なものだったが、最近は様々なタイプのDKに改装するケースが出てきている。子育てを意識するなど多様なニーズに応えるためだ。

キッチンの多様化は新築住戸ばかりではない。既存住戸でも新しいタイプのキッチンタイプにリニューアルするケースが出てきている。例えば、埼玉県鶴ヶ島市の「かわつるグリーンタウン松ヶ丘」では、入居募集前にキッチンをリニューアルすることで団地内で様々なキッチンスタイルを選べるようにしている。従来のオープンキッチンにバックカウンターを新たに設けたり、対面式のカウンターキッチンを採用することで、入居者は自分のライフスタイルに合ったキッチンを選べる仕組みだ。

この団地で間取りやキッチンの設計を担当しているのは、実際に子育て中の女性職員たち。多様なニーズの中から、特に子育ての暮らしのシーンを想定して間取り改善を行った。例えば、上図「AFTER2 対面＋ローカウンターキッチン」に改修したケースでは、子どもの椅子の高さにカウンターの高さを合わせ、そこで宿題をしている子どもの姿を見守れるような配慮を行った。

子育て中の家族にとって、親がキッチンから子どもの様子を確認できることは、大きな安心につながる。構造壁があって対面式にできない部屋は、上図「AFTER4 バックカウンターキッチン」のように、キッチン内に多機能カウンターを設けることで豊富な収納と広い作業スペースを確保し、子どもと一緒に料理したりすることができるようにしている。